

〒195-8585

東京都町田市金井町2160

和光大学G112(6棟1階)

044-989-7777 内4112

www.wako.ac.jp/gender/

五月一九日、プレイバックカーズの方々をお招きして、パフォー  
マンスイベントが行われました。プレイバックカーズは、参加者の  
体験を、演技者が即興で演じる「プレイバックシアター」形式の  
劇団です。今回は「ジェンダー」という切り口でのパフォーマンスでした。

## ジェンダー・フリーが私の体験になる日。開催

ワークショップでは、参加者が、どれぐらいジェンダーについて身近に感じているか、ということを確認するためグループに分かれました。次に、参加者全員がバラバラに、三人の輪を作って、それぞれの「男なのに」「女だから」といったジェンダー体験を話し合いました。私はそういった記憶がなかったのですが、九州の方が「洗濯おけも男女別々」という話をされて、おどろきました。その後、参加者全員の体験をかんがみる場面がありました。和光大生はめぐまれているようで、バイアス体験者は少数派でした。

プレイバックシアターでは、参加者の「今日の体験」をプレイバックしてもらいました。今日の出来事なので、記憶も鮮明で、それと照らし合わせることで面白かったです。最後に、メインとなるジェンダー体験のプレイバックでは、参加者の3人にインタビューを行って、体験の雰囲気をつかんだ上で演じられました。そこでは、「父・娘」を女性(父)と男性(娘)の演技者が演じる場面もあり、とても新鮮でした。

ただ、プレイバックシアターという「技法」は、「自らの経験」を外から見せることによって、演じられた状況が「客観的」であると思わせる。そこに、治療的教育的意図がうかがえた。しかし「経験」とは、人間関係の中で試行錯誤しつつ考えるもので、「技法」によって当てはめるものではないだろう。中村泰介(人間関係学科2年)



参加者の一人に自分のジェンダー体験を話してもらい、即興劇に。

今回プレイバックシアターの皆さんに、恋人にふられた経験を演じてもらい、多くの発見がありました。

恋愛には？がいっぱいですがなぜこんなに相手のことが好きなのに拒まれるのか？自分のどこが悪いのか？私の悪いところ全部直すから戻って来てー！！(絶叫)しかしこちらが熱くなるほどあつちは冷めてしまったり…。

しかし熱くなると周りが見れない。だいたい「悪いところを直す」と言っても自分の短所をズバリ指摘されると、反発したり・否定したりと、素直に受け止められないもの。

プレイバックシアターでは、自分自身を演じてもらうので、相手から見た自分と向き合うことができます。その時の相手の気持ちが見えてきます。またまわりの仲間とその経験を再体験することで、辛い体験も過去のものとして、新たに踏み出す勇気がわいてきます。

長田 円香

【プレイバックカーズ】教育、女性、政策など、様々な分野で講義・研修。パフォーマンスの活動をしている劇団。  
http://.playback-as.com

「ラスト サムライ」にみる  
武士道と男らしさ

林 真一郎



「ラスト サムライ」でアメリカ人が描いた武士道は日本人が抱くものとは少し違うのではないか。最初に映画館で観て単純に面白かった一方で、私はこのように感じた。それがこの映画を素材にするキツカケだった。封切前後の武士道熱の高まりは、たとえば、企業のトップが近頃続いた不祥事を背景に組織人の規範としての武士道を強調するなど、公の場でのタテマエが語られることに見受けられた。私は、個人のホンネのレベルで武士道や男らしさの何が今求められているのか、ということを考えてみたかった。両者とも多分にタテマエの世界での虚構にすぎないかもしれない。が、その中に幾分かホンネも含まれているのではないか。文化の違う日米の観点から検討できるといった立体的なおもしろさも期待できることから、「ラスト サムライ」を取り上げてみた。当日は以上のほかに、新渡戸稲造の「武士道」や三島由紀夫の「葉隠入門」、男性役割に関する日米の最近の調査結果などをスライド資料で紹介した後、フリートークとなった。「葉隠」の内容をよくご存知の方の発言があったり、ホンネの武士道や男らしさがあるのか、といった意見があったりで、楽しい一時間であった。一言でいえば、私はこの映画から、確固とした男性アイデンティティのモデルを渴望するアメリカ人の「あがき」を連想した。「ラスト サムライ」で理想化された「武士道」は男性性の新たなモデルを提示できたのか。それは個々人が自分のホンネに照らし合わせて熟考すべき問だろう。

## モノにみる女／男 開催

昨年に続き、今年度も四月十九日～二八日まで図書館梅根記念室で展示を行いました。

今回は性別による色、形、大きさの違いが時代や地域によって、どのように表現されてきたか、表現されているか、履物とアジアのモノを集めました。昨年と比べ、陳列されたものの表情が異なるため、自分たちの地域を中心として、縦の軸で時代を見るだけでなく、横の軸で異なる地域のモノにも広がっていたので、自分たちとは違う別世界に触れたように、学生の反応には「不思議な感じがする」との声もありました。

出展物は、学生からも借りて行いました。その影響もあつてか、出展した学生を中心として他学生も興味を持って見学に来てくれました。最終日には、ジェンダーフリースペースで「ジェンダーを語るタベ―モノとの関係で」を開催しました。出品者の教員・学生を中心に、学外からの来客もあり、色によるジェンダー表現の多様性について話が盛り上がりました。



上：韓国の子ども祝着



中：古今東西の履物



下：アジアの様々な楽器類

## 男が家事で、女が仕事？

坂爪 洋美

四月〜六月「アットホームダッド」というドラマにはまっていた。内容をご存知ない方もいるだろうから、ストーリーを簡単に紹介しよう。ある日突然リストラを言い渡された阿部寛演じる主人公は、主婦ならぬ主夫業に専念することになる（篠原涼子演じる妻が替わりに働きにでる）。当初「主婦がやる仕事なんて大したことない」とバカにしていた主人公は、実際に家事に専念するにつれて、その難しさを実感するようになる。そして、隣人の先輩主夫や周囲の幼稚園ママたち（主人公には幼稚園児の子供がいる）に時にはもまれ、時にはサポートされながら、家事のスキルを獲得し家族の大切さを確認していく、というコメディである。

このドラマは、大多数の家族の形態とは異なり、女性でなく男性が「主婦業」を極めていくところと面白さがある。最初の頃は私は楽しくドラマを見ていた。しかしだ。後半になる頃には、「えーっ、それはないだろー」とテレビに向かって独り言を言う機会が増えてきた。例えばある回の話はこうだ。家事の合間にスーパーのパートを始めた主人公は、家事がおろそかになるという理由で結局パートをやめることにした。妻にパートを辞めることを告げた際、「（忙しくて）今日も冷凍のアジフライがでてきたらどうしようかと思っちゃった（妻）」「なんだ（冷凍だと）ばれてたのか（夫）」というやりとりがあった。そうくるか。それでいいのか？「たまには私がつくろうか」とか「せめて今日はエビフライにしてね」でもいいんじゃないか？

私が引つかかっているのは、夫婦間での分業が強固に維持されていることだ。ドラマの中で「男は仕事・女は家事」という性役割分業のうち「性役割」という部分は、「男は家事、女は仕事」と覆されていた。しかし「分業」は強固に維持されているのである。働く妻はほとんど家事をしない。確かに分業は効率的な仕組みなので、一気にこれを放棄することは困難であろう。せめて「強固な分業」から「柔らかな分業」へと移行することはできないだろうか。次は是非そんなドラマを見てみたい。

さかづめ ひろみ（世話人・人間発達学科）

## ジェンダーフリー初夏のシネマ

今回は有志学生による食堂横に作られた大きな看板が目印となった、毎年恒例のシネマイイベント。六月二十三日より毎週水曜日に上映を行いました。

（上映作品）

『めぐりあう時間たち』2002、米／『女はみんな生きている』2001、仏／『ランド・アンド・フリーダム』1996、英・西・独／『くじらの島の少女』2002、豪・独

『ランド・アンド・フリーダム』に寄せて

今、私たちは国家の暴力が肥大化し暴走するのを目撃している。イラクに侵略戦争が行われ、自衛隊も派兵されてしまった。こんな時代の場合のなかで、この作品は現代の私たちに問いかける。

1930年代、スペイン内戦を舞台に革命に結集した人々の理想と現実を描いたケン・ロッチ監督の傑作で、孫娘が祖父の遺品を整理しながら、追想として物語は展開していく。栄光や英雄的なたたかいかいだけでなく多くの矛盾も現れてくるわけだが、革命闘争における暴力や権力の問題、党派の問題、ジェンダーの問題などが丁寧に描かれている。

彼ら彼女らの意思や革命の歴史は意味のないものなのだろうか？確かにそれはロマンや夢想だったかもしれない。しかしながら、混乱する世界で今を生きる私たちには、何を考えどう生きるのか？このような古い古された命題が個々人にシビアに問われているのではないか。「やり方」はその人の自由だけだ。

人間関係学科3年・渡辺学

後期もイベントを計画中です。お勧めの作品があれば是非ジェンダーフリースペースまで知らせてください。

# 海外情報

## 世界女性会議から十年、NGOの動向について 船橋邦子

6月30日から7月3日、タイのマヒドル大学で「アジア・太平洋NGOフォーラム2004、北京+10」が開催された。

このフォーラムの目的は1995年第4回世界女性会議から一〇年を経て、2005年にニューヨークの国連本部で開催予定の「女性会議、北京+10」にむけて、1995年に採択された『北京行動綱領』の何が実現したのか、何を女性たちは獲得したのか。を検証し、今日なおも直面している問題を鮮明にし、その解決のためにアジア・太平洋地域のNGOの立場で、国連へ提出するための勧告をまとめることだった。

このような国連主催の国際会議でNGOが堂々と自分たちの意見を述べ、積極的にかかわり、国連採択文書にNGOの意見が反映されるようになったのは1990年代に入ってからのことである。1975年、メキシコでの第1回世界女性会議以降、世界の女性たちは政府会議と平行してNGOフォーラムを開催し、自らの経験を語り、情報交換し、ネットワークを広げ、力をつけてきた。1992年、環境サミット、1993年、世界人権会議、1994年、世界人口開発会議、1995年、女性会議や社会開発サミットにおいてNGOとして政府会議に對しロビー活動を行い、それを、より効果的にするために地域ごとに集団の声を「オルタナティブ宣言」として提言にまとめてきた。その結果、いずれの会議も地球規模の問題解決には政府の力以上に国境を超えた現場と専門知識をもったNGOが不可欠だという認識が国連では深まり、各国の政府代表団にNGOが含まれるようにもなり、政府間会議でもNGOが発言する動きが顕著になってきた。

自身は、1995年北京会議、2000年ニューヨークでの「女性特別会議」にむけて提言をまとめるフォーラムに参加し、今回は3度目だった。このために5年前と同様、日本国内のNGOが「女性と貧困」「教育」「健康」「経済」など十二の重大領域についての成果と今後の課題をまとめた「NGOレポート」の作成に1年を費やした。フォーラムには各国のレポートが持参され、それをもとに本会議、ワークショップで討議されたことが提言としてまとめられた。NGOのうねりは一層重要性を増している。

### 本棚から

### 『鬼哭啾啾』

辛淑玉著 解放出版社 2003年



在日三世である辛淑玉さんが初めて語った壮絶な個人史であり、彼女の一族の半生記である。日本国内の激しい北朝鮮バッシングの中で意を決して記したものだ。1960年〜80年代に行われた北朝鮮への帰還事業をはじめ、拉致被害者同様、国家に翻弄された人々がいることを私は本書を通して初めて知った。私たちが知らなくてはならない歴史がここにある。

読後、言葉が出ないほど大きな衝撃と感動が残る。軽快で明確な文章なので、とても読みやすいところも魅力的だ。私からは、是非一度読んでみてほしいという一念だけである。

(野口春華・人間関係1年)

\*ジェンダーフリースペースでも扱っています。

### 2004年度 世話人メンバー

\*50音順 ◎代表

- ◎ 井上 輝子 (人間関係学科)
- ◎ 植村 洋 (表現文化学科)
- ◎ 大橋 さつき (人間発達学科)
- ◎ 奥 須磨子 (経済学科)
- ◎ 加藤 三由紀 (文学科)
- ◎ 吉川 信 (文学科)
- ◎ 坂爪 洋美 (人間発達学科)
- ◎ 杉本 紀子 (表現文化学科)
- ◎ 林 真一郎 (人間発達学科)
- ◎ 半谷 俊彦 (経済学科)
- ◎ 船橋 邦子 (経営メディア学科)
- ◎ ロバート・リケット (人間関係学科)